

教師の  
腕前診断文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立夏見台小学校)  
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

## 「待つ」ことで子どもは動く

教師が「待つ」ことで子どもの気付きを促し、自ら行動しようとしています。

今回はそんな事例を紹介します。

## 1 仕事が終わりに、遊んでいる子への言葉かけ

運動会の前日準備です。テント張り、ライン引き等々、教師の指示で子どもたちは分担の仕事に精を出しています。

着々と準備が進む中、校庭の所々で追いかけて遊んだり、大声を上げて談笑したりする子どもを目にするようになります。自分の分担が終わったからです。暇になったのです。

一方で、分担が終わらずに仕事に励んでいる子どもたちもいます。

大人なら終わっていない仕事を手伝おうとするのですが、子どもにそんな機転を期待するのは無理です。

準備が終わりを迎えるほど、暇な子どもが増えてきます。

## Q1 彼らにどんな対応をしますか。

- ①そのまましておく。
- ②教室に戻るように指示する。
- ③マイクを使って、「分担が終わった人はお手伝いをしましょう」と指示する。
- ④遊んでいる子どものそばに行って、「自分でできることを見つけてお手伝いをしよう」と指示する。
- ⑤朝礼台の前に集合させ、座らせたままにしておく。

①は幻想主義、教師の責任放棄です。

自主的に仕事を見つけて欲しいという願望の表れなのでしょう。残念ながら、人間は楽な方に流れます。子どもはなおさらそうです。

もしかすると、うまく子どもにかける言葉が見つからないのかもしれないね。

いずれにしても、良くないことは良くないと気付かせ、何をすべきなのかを教えるのが教師の務めです。

②は仕事量の不公平感を覚えさせます。

仕事の速い遅いが能力に起因するのであれば、子どもは納得します。しかし、仕事の内容によってそれが生じるのであれば、楽な仕事を担当した方が得です。

また、「暇な子どもは邪魔。仕事をしている子どもにも悪影響を与える」という発想で教室に帰らせるのでは、金八先生の「腐ったミカン」と同じです。

③は子どもの意欲を喚起するように見えますが、効果はありません。

なぜか。それは当事者意識がないからです。人は「自分に言われた」と思ったら行動するものです。教師が指示したにもかかわらず子どもは動かない。それは他人事だからです。

穏やかに指示していた教師の思いは怒りへと変わります。「何で言うことを聞かないのだ」子どもが動かない、動けない指示を出したという自覚がないので、悪いのは子どもだと責任転嫁してしまいます。

④はモグラ叩き状態です。このような場合の指示は個人を対象にするのではなく、全体に向けて行います。

私なら⑤です。

子どもたちは、自分が遊んでいることを自覚しています。それでも、遊んでしまうのが子どもです。神妙な顔をして教師のそばに集まりませす。座らせます。

「終わった人はここで静かに待っていてください」

怒られると覚悟してただけに、子どもたちは安堵の表情を浮かべます。

「ただし、また仕事をしている人がいます。君たちが静かに座っていれば、『そうか、仕事が終わればあそこで待っていればいいのか』というめやすになります」

仕事をしなくても静かにするだけで人の役に立つ。静かにすることが人の邪魔をしないということを知ります。

この後、大事な話を付け加えます。

「でもね、手伝えることを見つけたら、手伝ってね。力を貸すんだよ」

さらりと言い残してその場を去ります。子どもたちは座ったまま辺りを見渡します。すると、終わっていない仕事が目に見えなくなります。さっと立ち上がり、一目散に駆けて行きます。

一人が仕事に復帰すると、残された子どもはウカウカできなくなります。大勢で「集合」している時は「みんながいるから」と気楽に座っていたのですが、人数が減るにつれて居心地が悪くなります。仕事をしていない、遊んでいる、皆の助けをしない自分に気付くからです。

教師がお説教をしなくても、子ども自身が気づき、行動を起こします。

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

## 2 ホイッスルを使わない体育の集合

サッカーの授業中のことです。校庭では、グループごとに練習をしています。次の課題を伝えるために子どもたちを集合させます。

### Q2

どんな方法で集合させますか。

- ① ハンドマイクを使う。
- ② ホイッスルを吹く。
- ③ 手をポンポンと叩き、「集合」と静かに語りかける。

「①」は愚の骨頂です。

広いといつてもたかだか校庭の広さです。少し大きな声を出せば聞こえます。

児童数の多い学校は2クラスで校庭を使用していることがあります。ハンドマイクを使えば、迷惑をかけてしまいます。

一般的には「②」でしょう。ホイッスルを吹けば、離れている子どもにも音が聞こえ、教師に注目します。集合、試合開始や終了、注意時にホイッスルを使うことは常識です。

では、ホイッスルを使う場面はどんな時でしょうか。肉声が届かない、緊急性がある、非常事態の時です。

一方、この場合は必要性があつてホイッスルを吹いているのでしょうか。当たり前のようにホイッスルを吹いている現状を振り返る必要があります。

私は「③」です。手をポンポンと叩き、静か

に「集合」と言います。

教師のそばにいた子どもはすぐに集合します。教師を一心に見つめ、胸を張って体操座りで待っています。遠くにいる子どもは、気付かずに練習を続けています。

早く集合した「良い子」たちの反応は二つです。遠くにいる子へ「集合だよ」と声をかけます。もう一つは「良い姿勢」のまま待つ。

早く集合した子は、たまたま近くにいたから集合できただけです。立場が逆なら「早く集合して」と催促されます。

大事なことは、関心を持つ、友達を労わる、気遣うという「思いやり」です。

たまたま近くにいただけという自分の状況を客観的に分析し、そうでなかった友達にどう対応するかが人間としての成長を左右します。「遠くにいるから気付かないのでしょね。もう少し待ってみましょう」



早く集合した子どもは、遠くにいる級友に指示が届かなかつたことに気付きます。すると、声のトーンが変わります。「ちゃんとしろよ」という責める気持ちでなく「集合だよ」という寛容な心、思いやりのある言葉に変わります。わざわざ遠くのチームに駆け寄り寄る子どもがいます。教師はこういう子どもをすかさず認めます。

「迎えに行つてくれてありがとう。お陰で遠くのチームも集合できたよ」

迎えに来てもらったチームから「ありがとう」というお礼の言葉が出ます。もし、出なければ「呼びにきてくれてよかったね」とさりげなく言います。大方の子どもは「ありがとう」と返します。「してもらったらお礼を言うのは礼儀だよね。えらい」とほめます。

無意識にしたことは認め、意図的にしたことほめます。

時にはわざと遠くにいる子どもの方に移動します。聞こえなければ聞こえる位置に教師が移動すればいいのです。

集合していた子どもも一緒についてきます。場の雰囲気、何か「変化」が起こります。遠くにいた子どももそれに気付きます。

その瞬間に立ち止まります。遠くにいた子どもたちも「集合だよ」と気付きます。

誰を叱ることもなく、集合が完結です。

子どもを信じて「待つ」指導を心がけると、子どもは自分から「動く」ようになります。